

～「七飯町海外交流派遣研修 2017」報告書～

町民代表 まつもと 松本 あきら 明

この度、町民代表としてコンコードに研修視察に行くことができ、長年の念願を叶えることができ大変うれしく思います。約2週間のアメリカ滞在は数々の貴重な異文化体験と、楽しく忘れがたい思い出を残してくれました。

1. ホストファミリー ハウエル夫妻

今回、1週間ホームステイさせていただいたのは、マークさん、パムさんご夫妻の家。ご主人のマークさんはコンコードの電力供給やインターネット接続サービス部門で働いている。コンコードは電力供給とプロバイダーの役割も町が行っている。奥さんのパムさんは元小学校教師で現在はユニタリアン派教会の日曜学校の先生をしている。街の中心部から20分ほどのほとんど森の中と言っていい環境に住んでいた。樹齢の古い、高い木々に囲まれた丘にあり、風が梢を渡るのを聞くのが心地よかった。

朝食を取っているとリスが巣穴から出てくるのが見えてかわいらしかった。リスは2種類いて、縞模様があり地面に巣を作るのがチップマンク、木に巣を作る縞模様のないのがスクイレル。秋は終わりかけていて、枯れ葉が道に散り敷かれていたが、あまりなじみのある草花を見ない中で、街の家の庭に朝顔やあじさいが咲いてるのを見かけることもあった。(あじさいは日本原産、朝顔も七飯からもらったものかなと思った) インディアンが作ったと思われるストーンサークルが庭にあり、正確に夏至の太陽の方角を指すと言っていた。自分の泊まった部屋(CIRだったクリスの部屋)が他の部屋から離れていて、夜中だろうが、朝だろうがトイレやシャワーの音を気にしなくてもいいのがとても助かった。時差ぼけではないのだが毎朝必ず4時半前には目が覚めていた。

ハウエルさん夫妻は気さくで、本当に親切な人たちだった。集合時間までに少しでも時間があると、行きつけの有機野菜の農場(コミュニティーサポート農場と言って、年間600ドル出せば、年何回行ってもそこで栽培している野菜を籠いっぱい持って帰れる)や農場の直販店、りんご園に連れて行ってくれた。夫妻は無農薬、有機栽培の野菜を食べるようにしていて、野菜はそういった農場で買うようだった。日本では見かけない野菜が多くて、見るのが楽しかった。白菜をNapa(菜っ葉) Cabaggeと言う名前で売っていたし、日本で言うカボチャはPumpkinではなく、向こうではSquashと言う事も知った。りんご園では自家製ドーナッツも販売していて、これがおいしかった。山羊や馬、豚、鶏などを柵の中で放し飼いにしているのも見た。生きた豚などを見たのは子どもの時以来だった。アップルサイダーはどここの農場でも見かけ、大きな入れ物で売っていた。サイダーは日本で言うサイダーではなく、果汁を搾ったままのもの。搾った果汁を濾過した物はジュース。アメリカ人は思ったよりリンゴが好きで、農場ではたくさん種類のリンゴを売っていた。コンコードは農業も盛んのように、ウェルチの発祥

の地で本社があるという。明治時代にマサチューセッツ州から七重官園に持ち込まれたリンゴもあるに違いない。ハウエルさん夫妻も毎日朝食にリンゴを食べていた。

マークさんの職場である、配電所とサーバーの中継所が一緒になったような場所に連れて行ってもらったし、カーライルにあるパムさんの教会にも行った。日曜学校の生徒と先の農場の納屋を借りて、「お化け屋敷」をやると言っていた。

朝食は私たちの要望も聞いてくれて、トースト、ベーグル、目玉焼き（ゆで玉子）、オレンジジュース、コーヒー（マークさんがどちらも毎日作ってくれた）、リンゴ、ヨーグルト、チーズなどで、自分の日本での朝食とほとんど変わらなかった。食パンが日本の物より小さく薄いのと、トーストにつける物の種類が多いかなという感じがした。ヨーグルトに Molasses（糖蜜）をかけると美味しいというのが発見だった。（私がコーヒーと Molasses がおいしいというので帰るときに持たせてくれた）

大きなテレビのある部屋はあるのだが、夜はテレビを見ないので、夕食後部屋に戻るまでに色々な話をした。コンコードの町政の仕組み、税金、家族のこと、夫妻のルーツなどなど。就職して家にはいない、上の娘さんの名前がアンドレアというのを聞いて私が、「プラダを着た悪魔」のヒロインの名前と同じですね」と言ったら、その日の夜は4人でその映画を見ることにしたり、最後の晩夕食にロブスターをごちそうになったときは、「スプラッシュ」という若かりしトム・ハンクスと人魚が主人公の映画を見ることにした（その映画でケープコッドに住むヒロインの人魚がレストランでロブスターをむしゃむしゃ食べるシーンがあるため）。

ペットの話もよくした。ペットの犬が親子2匹いて、子犬は人なつっこくて、悟楼さん（一緒にホームステイした団長）のおみやげの「イカめし」を勝手に探して食べたりと元気なのだが、母親犬が神経質で吠えてばかりいた。それで、夜中に家の周りを散歩したこともあった。街灯はなく、暗い森の中を4人と2匹で1時間くらい散歩したのも面白かった。日本のコオロギとは違うコオロギ（エンマコオロギほどうるさくない）が草むらで泣いていて空には満月が懸かっていた。

休日どこに行きたいかと聞かれて、ダイニングに貼ってあるアメリカの地図を見ていたら、コンコードとプリマスやケープコッドが意外と近かった。プリマスはメイフラワー号の上陸地であるし、ケープコッドはナットキングコールの「Old Cape Cod」という歌で知っただけだった。英語のリスニング力がまだそれほどでもないころ、ナットキングコールの「Old Cape Cod」は「きんこうのオーケーコー」と聞こえた。

私がそんな話をしていたら、「それじゃ、泊まりがけでケープコッドに行こう」ということになった。泊まりがけと言ってもどこに泊まるんだろう、などと思いながら、コンコードからマークさんの運転する車でハイウェイ（狭くて3車線、普通4車線）を1時間半走ると、ケープコッドに着いた。そこにはマークさんのセカンドハウスがあってそこに泊めてもらった。風光明媚でとても景色がきれいなところで、家の物置からすぐ裏の所にはカヌーやボートなどに乗れる湾や砂浜が続いていた。夕方と朝に散歩をしたが、松林や湿地や砂洲の続く湾の向こう側に夕日の沈む頃が一番きれいだった。周りは半分以上がセカンドハウスで、町は週末だけ賑わうといていた。レイカーズのオーナーの

別荘のそばを通りかかったら、ポロ競技場がついていた。(ここ2～3年やっているところを見たことがないと言っていたが) 夕食は地元の居酒屋で魚介のフライがメインの食事とビールなどをごちそうになった。新鮮な魚介類が獲れるのに、フライしか料理がないのが残念だったが、30分くらい待たなければならないほど混んでいた。

次の日、帰る途中にプリマスに植民した人たちの農場跡をテーマパークにしている施設に寄った。ピルグリムファーザーズが農場を作って自給自足の生活をし、植民したところである。メイフラワー号の復元船は修理に出ていてミニチュアの模型しかなかったが、船内に積んでいたものなどが展示されていた。

Tinderbox の実物を見た。周りに住んでいたインディアンの部族の住居も展示されていて、中で実際にネイティブアメリカンの人たちがガイドをしていた。中でたき火をしていて、そのそばで話をしていた。夏用(茅で葺いている)と冬用(樹皮で葺いている)の家があり、住み替えるらしい。その頃(17世紀初頭)の人々の生活も再現されていて、ろうそく作りや羊毛を紡ぐ作業、インディアンの飾り羽根作りなどが実演されていた。

圧巻だったのは17世紀初頭の村がそっくり復元されていて、家の中で当時の衣装を着た人たちが当時の生活を再現しながらガイドしていたこと。一つ一つの家にガイドがいて、料理を作ったり、生活の様子を説明していた。飼っていたであろう家畜も放し飼いにされていたし、畑で作物も栽培されていた。

17世紀初頭と言えば日本では江戸時代の初めだが、コロニーの生活も決して豊かと言えるものではなかったことがよく分かる。家は狭くて一間で土間。ベッドはあるが粗末な木で堅い。衣服、寝具の素材も悪く着心地が良くない。料理をすれば竈の煙で煙たいし、鍋や食器も粗末で使いづらそうなものばかりだ。家の建材も粗末ですきま風が入ってきて冬はさぞ寒かったろうと思われた。アメリカの歴史の一コマが実感を持って理解でき、とても良い経験になった。

2. コンコードについて

コンコードの町は予想以上にきれいで、歴史と文化の薫り高い町だった。渡航前にコンコードのことを少しでも知っておこうと、アメリカの歴史の本を読んだり、ソローの「森の生活」(邦訳が岩波文庫から出ている)や「若草物語」、「エマーソン論文集」を読んだりした。「森の生活」は英語の原文にも挑戦したが、難しくて半分くらいで挫折した。(後でコンコードのスーザンさんなどに聞いたところでは、ソローの文章はアメリカ人でも難しく、大学生くらいでやっと読めるそうだ)エマーソンの邦訳の文章は訳が硬く、何を書いているのかよく分からなかった。エマーソンは講演が得意で世界各地を講演旅行しているし、詩人でもあり「コンコード賛歌」も書いているくらいだから、文章が下手とは思えない。原文を読んだ方が、言いたいことが却ってよく分かるのではないかという気がした。多くの文人たちをコンコードに引きつけるマグネットのような役割をした、アメリカ文学の祖のような人である。

滞在中にコンコードの名所・旧跡をほとんど全て訪ねることができたのはよかった。

コンコードの中心街は古い町並みがよく残っており、銀行、チーズ屋、服屋、リカーショップなどがあつた。古地図に載っている教会が同じ所に建っていた。コロニアル風の建物が多く、「ニューイングランド」という感じのする所だつた。

中心街の近くにある中央図書館も案内してもらつた。25万冊の蔵書があり、ソローやエマーソン、オールコットの胸像があつた。二階にソローやエマーソンの展示をしている部屋があり、直筆の原稿や写真などがあつた。胸像の作者であるダニエル・フレンチは、ミニットマンの像や、ワシントンD・Cにあるリンカーン大統領の像も作つた有名な彫刻家でコンコード出身である。案内の方にエマーソンの「超越主義」について聞いたが、要するに「論理より直感を重視する考え方」とのことだつた。

エマーソンやソローについては **Concord Museum** にもたくさんの展示があつた。特にソローの原稿、日記、私物、写真などがいっぱい残されていた。ソローやエマーソンの書斎、寝室のベッドなどが復元された部屋もあつた。ソローが入れられた牢屋の鍵まであつたのには驚いた。

ソローの日記は「ジャーナル」と言われていて、当時の気候やウオールデン湖の周りの植生や動物相などが詳しく記録されているので、環境汚染が進んでいるかどうかの指標となっていると言つていた。直筆の字が何と書いてあるのか私には読めなかつた。エマーソンとソローはコンコードを代表する二大文人なのだが、「残念なのは、ソローはエマーソンよりハンサムでないこと」と町の人と言つているのを聞いて面白かつた。

同じく中心街の近くにあるタウン・ホール（役場）も訪問した。建物自体が文化財のような古いきれいな建物で、町政を担う枢要の方々が迎えてくれ、1時間ほど話をしてくださつた。コンコードに町長はおらず、タウン・マネージャーがその役をする。セレクト・ボードのメンバー5人が選挙で選ばれ（ただし、無給）、町政の施策を話し合つてタウン・マネージャーに進言する。タウン・マネージャーが、契約を結ぶ権限を持ち行政を執行するが、セレクト・ボードに解任されることもある。ギリシア・ローマの直接民主制を彷彿とさせるような仕組みで面白いと思つた。コンコードの方々に限らず、アメリカ国民は日本人より税金の使い道に関心が高いとも思つた。

コンコード2日目には、**Orchard House** と **Walden Pond** に行つた。**Orchard House** では館長さんがオールコットになりきつて衣装を着て色々説明してくれた。妹のメイがルイザのために描いた絵があちこちに貼つてあり、ルイザが使つた裁縫セット、姉妹で劇をした部屋、劇に登場するのに使つた階段、預かり育てていた姪の部屋、父ブロンソンの部屋（最後にはコンコードの教育長になり、アカデミーを作つた）などがよく保存されていた。天井が低く狭い部屋が多かつたが、きれいに整理されていた。元々は東京ドームくらいの敷地と40本のリンゴの木があつたので、**Orchard House** と呼ばれている。オールコットが好きすぎて、ここでガイドをしている日本人の女性と出会つた。帰る頃には見学者がいっぱい来て、人気の観光スポットである事が分かつた。

Walden Pond はそれほど大きな湖ではなかつたが、周りを背の高い木々に囲まれたとても美しい湖だつた。岸边は砂浜で、驚いたことに10月4日なのに泳いでいる人がいた。ここの近くにソローは2年2ヶ月住んで、釣りをしたり、魚や鳥を観察したり、湖

を測量したりしたんだなと思った。流れ込んでいる川があるわけではなく、わき水が水源らしかった。ここもけっこうたくさん観光客で賑わっていた。実際の場所ではないが、ソローが住んだ小屋が湖畔に復元されていた。中に入ってみると思ったよりずっと狭く、4・5畳位、ベッドは寝相が悪ければ落ちてしまいそうなくらい小さかった。鴨長明の住んだ方丈より小さいのではないか。売店の隣に、湖のジオラマやソローが測量に使った道具が展示されていた。どこか大沼の風景と似ていると思った。快晴で雲一つ無く、空と湖が抜けるように青かった。

Old North Bridge がある所は国立公園になっていて、観光客がたくさん来ていたし、レンジャーがいて、色々説明していた。Old North Bridge は木製のアーチ橋で、袂に独立戦争勃発の地の碑が建っていた。ミニットマンの像もあった。サドベリー川が流れていて、橋から見える景色がとてもきれいだった。平原と北に向かう道路が見え、近くに Old Mance もあった。休日にここに来て本でも読んでいたら気持ちがいいだろうなど思える場所だった。1775年4月19日にイギリス軍とコンコードの民兵がここで衝突して、独立戦争が始まった。イギリス軍が来た道と退却した道がすぐそばを通っていた。なぜここで始まったのか、コンコードの方々が論争していた。自国の成り立ちに関する歴史であるからアメリカ人は皆知っているようであったし、一度は訪れるところのような感じがした。エマーソンの祖父は牧師なのに独立戦争に参加して戦死したということも知った。

今回、七飯とコンコードのつながりは思っていた以上に深い、ということは何度も感じた。自然や気候が似ているだけでなく、農業が盛んな点も似ている。明治期の日本はマサチューセッツ州から先進的な西洋式農業を学んだと言えるので、七重官園とのつながりが深い人物も多い。場長の湯地定基（妹は乃木希典大将の妻）は札幌農学校の初代教頭 W・S・クラークにマサチューセッツ農科大学（現マサチューセッツ大学アマースト校）で教えを受けているし、2代目教頭で、札幌時計台や七重官園の家畜舎の設計をしたウィリアム・ホイラーはコンコード出身で、コンコードに農場を持っていた。彼は自分の家を円山館（Roundhill House）と呼んでいたらしい。彼の作った風見鶏がコンコードに残っていた。因みに同志社大学の創立者新島襄もマサチューセッツ農科大学で化学をクラークから学んでいる。

3. ソロー小学校

10月6日、コンコード4日目、午前中ソロー小学校を訪問した。ベヴァリー・ゴシアー（フランス語読みすると、ゴージェ。聞いてみるとやはり先祖はフランスからの移民だった）さんが連れて行ってくれることになっていたのので、マークさんにベヴァリーさん宅まで送ってもらった。ベヴァリーさんも元小学校教師で実際にソロー小学校に勤めていたらしかった。

ベヴァリーさん宅で見学の予定とソロー小学校の理科教育について少し説明を受けた。私が理科教師なので、4年と5年の理科授業を見せてもらうことになっていた。5年生では簡単な実験もあると言っていたので楽しみにしていた。

ベヴァリーさんには初日の見学後、昼食をごちそうになっていた。そこで火山のことや、イエローストーン国立公園の間欠泉 (Old Faithful)、グランド・キャニオンのモニュメントバレー、アイスランド (火山島で、世界で唯一海嶺が地上に出ている場所) などの話をしたことを思い出した。コンコードで訪問団のお世話をいろいろしてくださったが、今回残念ながら七飯には来られなかったリーさんの旦那さんが高校の地学教師だということでそういう話題で盛り上がった。

その後ベヴァリーさんの車でウエストコンコードにあるソロー小学校へ行った。日本だったら高校と言っても信じるような立派な外観の建物だった。玄関前で理科のコーディネーターの女性教師とぼったり出会い、挨拶をした。日本と同じで理科を苦手とする小学校教師が多いからか (小学校教師はアメリカも女性が多い) あるいは、理科教育の質を保つためか、このような先生が配置されているらしい。ネームタグをドアにかざすとロックが開くようになっていた。さすがセキュリティはしっかりしている。

日本の小学校より幅が広く天井も高い廊下を歩いてすぐ5年生の教室に行った。元東京の私立小学校にもいたことのある女性教師が授業をしていた。STEM という、日本で言う総合学習と理科を合わせたような活動だった。絶滅の危機に瀕している **Blanding's Turtle** というコンコードにいる亀を飼いながら、亀を通して動物の生態や科学の方法について学ぶ活動のようだった。大学の研究者の監修を受けていて、最後には繁殖させて自然に戻すと言っていた。

教室は10メートル四方くらいの広さで、日本より広く、一角にソファなどで仕切られたフリースペースがあり、そこに集まって教師の話を聞いていた。教室の前面には、ビルトインされた電子黒板があり、そばにある担任教師の机上のパソコンとつながっていた。インターネットにももちろんつながっていて、ネットや教科書の画像、教師作成のプリントなどがすぐ表示できるのがうらやましく思えた。

出入り口は後ろの一箇所しかなく、壁3面が生徒の物の収納や作品の掲示に使えるようになっていた。窓側には日本と同じようなロッカーがあり、教室後ろや廊下側にも収納スペースがあった。字の書ける黒板なのかどうかよくわからなかったが、教師が黒板に字を書くのは見なかったし、子どもがノートに字を書くのも見なかった。机は日本と同じ天板が開くタイプと、中が引き出しになっているタイプ両方あったが、天板は日本の机より広かった。教師の机の周りにも収納スペースがいっぱいあった。前面の右には流し (手洗い場) がついていた。

生徒は20人よりは少なく、一見日本人かと思うアジア系の子も数人見かけた。子どもたちと挨拶をし、何人かの子から質問も受けた。びっくりしたのは、座席を見たら半分以上の子どもの椅子がバランスボールだったこと。普通のバランスボールとは違い、底に突起が何本も出ていた。なぜ、普通の椅子ではなく、こういうバランスボールのような物に座っているのかと聞いた。やはり生徒が落ち着くようにということだった。安定が悪く、しっかり腹筋に力を入れていないと転げ落ちるので、落ち着かせるのと体幹を鍛えるのに効果があるからということだった。それほど落ち着きのない子はいらぬようには思えなかった。私に科学の知識をいろいろ披露してくれた賢そうな子もいたし、質

問をいっぱいしてきた女の子もいた。

私が教室に行ったときは、今までの活動の復習をしていた。亀の個体識別の話をしてしたが、最初私もよく分からなかった。「Notch」という単語が何度も聞こえた。教師と子どものやりとりを聞いていると、分かってきた。「Notch」というのは、亀の甲羅にある「切れ込み」のことで、亀は1匹1匹どの甲羅に「Notch」があるのかが、人間の指紋と同じで違うらしい。そこで、それを使って個体識別をしているようだった。飼っている亀の甲羅に番号を付けて、何番の甲羅に「notch」があるかを記録していた。もちろん名前を付けたり、他の特徴でも区別するのだろうが、科学的にはそのように識別するらしかった。

亀のオス・メスがどう決まるかということも復習していて面白かった。卵が地中にあったときの温度によって決まるらしい。

実験は何をするのかと思って見ていたが、電子天秤で体重を測っただけだった。体重の変化はずっと記録しているらしかった。

次に4年生の理科の授業を見せてもらった。大気圏のことを勉強していて、電子黒板に画像や教科書を提示しながら女性教師が一生懸命説明していた。この単元の最初に注射器を使って空気の性質について勉強していたようだった。空気の性質を注射器を使って4年生で勉強するのは日本でも同じなのだが、大気圏の構成、つまり対流圏、成層圏、熱圏などについて勉強するのは日本では中学校である。対流圏では空気が何パーセントで、温度が何度、などということまで勉強していたが、4年生でそこまで勉強するのは難しすぎないかと正直思った。子どもの活動は最後に教師が用意したプリントにまとめを書くだけだった。あまり書けているとは思えなかった。教科書はページ数が多く、かなり厚かった。日本の教科書のように、それを使って授業するような感じで作られてはいない。じっくり見る時間がなかったのが残念。教科書はオンラインでいつでもアクセスできるので子どもは教科書を家に持ち帰らないようだった。子どものノートを見ると今までもあまり書いたような形跡がなかった。理科のカリキュラムについて知りたかったが、基本的にカリキュラムは日本とそれほど変わらないようだった。月の満ち欠けの掲示物が貼ってあった。これも日本では4年生で勉強する。

それと、予想と違ってソロー小学校に理科室はなかった。実験はどうしているのだろうと思った。どうも薬品などを使う本格的な実験は中学校になってからのようだった。実験は教室でせざるを得ない。それでだと思いが、教室の後ろに単元毎の実験ができるセットが段ボールに入って教育委員会から届いていた。1人1セットで袋に入ってキットのようになっていた。これは小学校教師にしたら実験の準備の手間が省けて大変助かる有り難いシステムだと思った。

大気圏を説明するのに使っていた掲示物も、市販のとても分かりやすい画像が入った物を使っていた。日本では教育用の画像が入った掲示物などは教材会社で売っているのをあまり見かけない。ネットで画像を探せばいい画像があることはあるのだが、教育用には考えられていないし、プリントアウトして、ラミネートするという手間が大変でなかなか授業に活用できない。

残念ながら授業を見せてくれた先生やコーディネーターの先生、校長先生などとじっくり話をする時間は取れなかった。帰りがけに3年生がゲストティーチャーから話を聞く特別授業があるというので見せてもらった。会場は何と「映画館」といってもいいような講堂（Auditorium と言っていた）で優に200人以上は座れる座席があり、前面に映画館並の大きさの、パソコンとつながったスクリーンがあった。小学校に講堂があるのは日本では筑波大学付属小しか知らない。その広い会場の前方に3年生が30人ほどちょこんと座っていた。ゲストティーチャーは地元のテレビ局に出ている、若い女性の気象予報士だった。3年生に天気のこと、雲の種類などについて画像を映しながら早口で一生懸命説明していた。こちらも3年生にこの内容で理解できるのかと思いながら聞いていたが、雲の画像を示して「この雲は何という雲ですか」と聞いたら、一人の男の子が「入道雲」（積乱雲）とちゃんと答えていたのには驚いた。日本では5年生で勉強するが、分からない子がいっぱいいるのに。私も聞いていて面白い話だったのでもっと聞きたかったが、後ろ髪を引かれる思いで小学校を後にした。

項目を3つに絞って研修の報告を書いたが、まだまだ書きたいことがいっぱいあった。2週間のコンコードやアメリカでの滞在は貴重な経験と楽しい思い出と人々とのふれあいの記憶を残してくれた。この研修の機会を与えていただき、実現のためにいろいろお世話していただいたコンコード、七飯双方の全ての方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。